

国際協力特別賞

平和と停戦を求める。高校生の私たちからの一歩

長野清泉女学院高等学校 3年 ハービー みき杏

「私は、国のため、家族のためなら、命を失ってもいいと思っています。」ニュースで見たウクライナ人男性の一言に、私は衝撃を受けた。今年二月、ウクライナで戦争が始まり、爆撃などでたくさんの方が傷つき、大切な人との別れに涙を流していた。今まで、命の大切さ、人を傷つけてはいけないこと、どんな命も同じように大切だということを学んできたのに、私の目にとびこんでくるニュースはそんなことを教えてくれなかった。歴史で学んだ第二次世界大戦の時のことが思い出された。二度と繰り返してはいけない悲劇の歴史として学んだことが、今起こっていることと重なって、とても怖かった。日本が「国のため」に命を失うと言う人を平気で報道していることにも危機感を抱いた。このままただのニュースとして傍観していたらいけないのではないか、私たち自身が、そこにいる一人一人の人々が何を思っているのか自分の頭で考えなければいけないと思い、爆撃の恐怖もなく平和の中に生きる一人の高校生として出来ることを考えた。そして幼なじみの友達と二人で相談し、平和を求めるデモを行うことにした。

デモをする一番のきっかけとなった報道がある。ウクライナ人のお父さんが戦争の前線に向かう列車に乗り、七歳くらいの女の子が柵の間からお父さんを見送っていた。インタビューされた女の子は、はじめは「お父さんが誇らしいです。」と言っていたけれど、話しているうちに「お父さんに帰ってきてほしい。」と目に涙を浮かべた。家族ほど大切なものはないのに、ウクライナやロシアできっと毎日起きている別れを思って、私はとても悲しかった。ウクライナの人やロシアの兵士も、これ以上傷つけてはいけない。一日でも早く停戦して、こういう別れをする人がいなくなってほしいと思った。デモをきっかけに自分と同じ高校生、自分の地域の人たちが少しでも、苦しみ、悲しんでいる人のことを想像するきっかけになったらという思いで行った。ニュースで見るデモはウクライナを応援するものが多かったが、私たちは、ウクライナ側、ロシア側どちらか一方につくのではなく、一日も早く停戦してほしいという平和と命の大切さを訴えるデモを行った。そして、武器を置いて停戦してほしいという願いを届けるために参加者全員で花を持ち、シュプレヒコールの代わりにWe・are・the・worldのメロディーにのせて「送るあの子の手のぬくもり、また抱きしめるその日まで」と自分たちで平和への願いを込めて歌詞を考えて歌った。デモを企画してから、警察への申請やチラシの作成、当日に持って歩くために折り紙でチューリップの花を作ったりして忙しかったが、平和と停戦への思いを大切に友達と二人で協力した。デモの当日には、学校の友人や知り合いだけでなく、当日に出た新聞の記事を見て共感して集まってくださった方も合せて50人ほどが集まり、見慣れた町の車道を歩いた。こんなにたくさんの方が同じ温かい気持ちで歩いているということがとても嬉しく、この思いがウクライナやロシアの人々に少しでも届いてほしい、と思った。世界はとても広いけれど、こうした小さな一歩の積み重ねで変えていけるのではないかと感じた。

「平和を作る人になってください。大人が犯した罪を繰り返さないでください。」ロシア兵士が、占領したウクライナの学校にこう書き残したそうだ。ウクライナの兵士の中にも、ロシア兵士の中にも、痛くて逃げたい人、子どもに会いたくて涙を流している人がいるだろう。デモを行ったときよりも、戦争が長期化して被害が広がり、私はとても心配だ。同じ地球に生きる人たちが、一日でも早くほんの当たり前前の幸せと他人を思いやるやさしさにあふれる日が来ることを願っている。